

2014/4/21

英語科教育学Ⅷ 発表レジュメ (フィードバック)

報告者：Y.K.

担当箇所：The Art of Teaching Speaking Chapter.1 Factor 2-3 (p.15-22)

Factor. 2 カリキュラムについて

- ・カリキュラムとは「学習者のニーズに合わせて練り上げるもの」
 - いわゆる一般的な英語の授業においては、speaking と listening に重点が置かれる。
- ・一日何コマもあるような学校やプログラムでは以下の2つの状況が生まれる。
 - ① 特定のクラスで特定の能力に対して時間を割く
 - ② すべての授業ですべての技能をカバーする

In the Real World

Saudi Arabia の軍事学校

→ テストに合格してアメリカに行くことを第一の目的としている生徒たち

カリキュラム： どの授業でどのページを扱うか

→ 評価の対象は適切な進度で授業が進んでいるか。

筆者の失敗談：encyclopedia と same same dictionary の違いを説明しようとした時のこと

→ 英語で違いを説明したが、生徒は正しく理解してくれなかった。

☆ 教科書やテストを中心としたカリキュラムの中に speaking の要素を加える必要はない

日本の英会話学校

日本人にとっての英会話は趣味であり「暇つぶし」

意識の高い学習者は、TOEFL などの試験でできるだけ早く良い点数を取ることを望む

→ 日本の英会話学校では、学習者に英語を練習する機会を提供することが求められる

・・・ Speaking Activity に重点が置かれる

Discussion and Practical Application for Your Teaching

カリキュラム：

One of the basic assumptions of curriculum development is that a sound educational program should be based on an analysis of learners' needs. (Richards: 2001)

この考え方に基づけば・・・

Saudi Arabia → test の合格が learners' needs であり、すべきは grammar & vocabulary

Japan → 練習の機会を得ることを目的なので experience を多く取る必要がある

☆ カリキュラムの設定は教師の裁量に任される（自分の教えたいこと・教育哲学によって）

→ 自分の教える生徒の実態を把握した上で適切なカリキュラムを設定する必要がある。

Factor. 3 授業で扱う話題について

- ・ 学習者が興味のない課題を扱っても、生徒の成功にはつながらない。
→ 話題選びも慎重に行われる必要がある。

☆ 話題選びのポイント

- ・ 年齢：年齢層が低ければ難解なテーマを扱うことはできない
- ・ 目的：academic な能力を求めるか、practical な能力を求めるか
- ・ 熟達度：難解なテーマを扱うには相応の言語熟達が求められる
- ・ 文化的な背景：文化体系が違えば、タブーとなる話題などに差異が生じる

→ いずれにせよ、話題の選択は教師である自分の責任となる

In the Real World

Saudi Arabia の軍事学校

Final exam に合格するために、そのテストに応じた話題が選ばれる。

→ 教師に話題の選択権がなかった。

日本の企業における英語教室

- ・受講生の熟達度はまちまちで、受講者の時間制約も厳しい
 - ・中間レベルの熟達度に合わせて、日本人にとって一般的で興味深い話題を選定する
 - ・文法や語彙の習得よりも do English を主眼に置いている

→ language game や discussion on light topics 等の活動が中心になる。

日本の若いテニス選手に対する英語教室

- ・教科書の内容に対しては興味を示さなかったが、有名なテニス選手の話には熱心に学んだ

→ 話題選びの重要性を如実に表している。

Discussion and Practical Application for Your Teaching

教師には、生徒の個人特性（年齢・学習時間・個性）を換えることはできない。

→ 話題を変えることはできる！

- ・生徒の分析結果や生徒のニーズに合わせた話題を選択することができ

る。

教師に求められること

- ・ 多くの話題をストックしておくこと（リスト化）
- ・ 話題をリスト化したものを生徒に与えて好きなものを選ばせる。

担当箇所の Discussion Points.

カリキュラムや話題の選択は、学習者の目的やニーズによって変動する。

→ ① 日本の学校教育における、英語学習の目的やニーズとは何か？

② ①が明らかになったとして、①に対する適切なカリキュラム・話題は何か？

フィードバック

☆ディスカッションの要旨

主に②に付いての議論 「各教育段階において適切な topics とはなにか」

小学校： マンガ

中学校： アニメ・学校生活・テレビ番組・音楽・映画・ゲーム・スポーツ

高校： SNS・日本はオリンピックを開催すべきか・将来の仕事

大学： 他国の文化・ファッション・専攻・結婚・国家観・英語教育

大人： 自己実現・死生観

など

これらの topics を一般化すると以下のような点を指摘することが出来る。

- ・ 小学校では教科としての英語でなく、activity として英語をとらえる
- ・ 年齢が上がるにつれて、抽象度が増していく傾向にある
- ・ 使用する教材に合わせて topics を決めるのではなく、教えるべき項目を抜き出して、それ

を全てカバーできるようにカリキュラムを設定するという考え方もある。

☆今回の発表・討議における問題点

今回の discussion points は、日本の学校教育における英語学習のニーズに関する討議をした後の適切な話題設定についてであった。これは、単純にニーズを羅列することを目的としたのではなく、現行の学習指導要領と照らし合わせて「現在の制度上は何を目的としているか」をまず明らかにし、その上で「学校現場で生徒が求めている英語学習とは何か」について考えることを目的としていたが、そのような議論が省略されてしまったため、結局、topics として何を選択すべきかを羅列するだけの討議になってしまった。議論の方針をしっかりと伝える必要があったと思う。

日本においては、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」ということが外国語学習の目標として定められているため、今回の討論のポイントでは、これを提示した上で、これが学習者のニーズに即しているか、という問いかけをするべきであった。

また、これに関連し、「言語や文化に対する理解を深める」ことを目的とする日本の英語教育においては、どのような topics を選択すべきであるかを議論すべきであった。これは発表の中で説明すべきことであったが、時間の関係、並びに、ディスカッションポイントの選定を教員に任せてしまったために、不十分に終わってしまったことであるため、以後注意したい。

☆ 上記の問題に関する私見

「言語と文化」への理解を深化させることが英語教育の狙いであることを鑑みれば、他国と日本の文化体系や言語体系の違いを明確にするため、日本の文化や言語との対象の中でこれらを考えさせる機会を創出させるべきであると考えられる。とすれば、現行の教材、並びに今回の討議で出たような身の回りの簡単な英語はあくまでも導入であり、その最終目標を達成するためにより抽象度の高い話題を選定する必要があるのではないかと考えた。

一方で、現行の教科書を見てみると、「リサイクル問題」や「偉人の歴史」といった、アクティビティにつなげることの出来る教材が多く配されているように思われる。例えば、偉人の歴史に関する文章の後では、生徒各自が自分で偉人の歴史を調べ、それについてスピーチをすることが出来るようになっている。これは、スピーキングやリスニングなどのアクティビティを授業内に多く取り

入れるには良い話題であり、4技能の向上にも貢献するものであるが、言語と文化の理解深化にどのように直結しているか、教師の側でも理解するのは容易ではないように思われる。

思考様式や言語そのものに関する話題は中学生レベルでも取り入れるのは容易であり、そのような抽象的な話題を取り入れられるべきであると考えられる。単語数など単純に英語のレベルを上げるのではなく、話題の抽象性をあげることもまた、生徒の外国語・海外文化に対する態度を育成する上で必要とされるように思われる。

このように主張する理由は多々あるが、一つには、小学校における英語の教科化の流れが現実的になってきたことがある。小学校では現在英語を使った簡単なゲームや歌を使った活動など、アクティビティを中心としたものが多くなるのは、小学生という学習段階を考えれば当然のことである。とすれば旧来のように中学校から英語をスタートし、中学校でアクティビティ中心の活動を行うスタイルはもはや通用しない。小学校にこれらの活動を前倒したならば、中学校では更に抽象的な内容を学び、高校では更にその先の論理的な科学論文に通じるような幅広く教養に富んだ話題（研究倫理や言語・文化・科学など文理問わず高校生段階で知っておくべき知識）を題材として扱う必要がある。これらの話題も年齢が上がれば、4技能に関わるような課題を設定することは容易であろう。

以上のような点から、抽象度尾高い教材・話題も前倒して実施すべきと考えられるのである。

Factor 4: The Two “Languages” – IN the Task versus FOR the Task

報告者：T.N.

歴史上、言語学習とは、文法や語彙、発音方法、綴りなど、その言語の一部を学ぶことを意味していた。

◊「**教養のある**」人々がラテン語を学び、言語の、特に単語を訳すことに重点を置いた、文法翻訳技法を使用

しかし、今日の人々は、読み書きや文法だけでなく、**コミュニケーションのための発話能力の習得**に、より重点を置くようになった。

会話能力を成長させるために重要な三つのポイント

- ① 重要な要素に関連づけた内容にするよう授業を組み立てる。
- ② 重要な要素を対話の中で示す。
- ③ ①、②を両方実践する。

・どのような発話課題においても、そこには二つの言語が含まれている。

「**実際にタスクの中で使われている言語**」

と

「**生徒がタスクを達成するために必要な言語**」

・ p.23 のタスクでは、

1. 挙げられている各国の人口を最も少ないと思う国から順に1～6まで順位付けし
 2. パートナーと自分の解答を比べ、同じ答えになるように話し合う
- ということが求められている。

・ **タスクの導入方法**

- × 「このプリントをきなさい。」などと初めから指示する
- 「南アメリカにある国を10個言える人はいるか。」などといった、簡単な課題を与える導入をしてから、タスクに取り組みさせる

・ タスクに取り組むうえで重要な語句として、*geography, rank, population* 文法的要素として、*the smallest, the biggest* などを生徒に教えるのは良いが、それだけでは、「このタスクのための言語」の半分には満たない。

なぜか？

◊

スピーキングタスクなので、実際に会話を行うために、“*I think that _____*” や “*Are you sure that _____?*” といった会話文(p.24 表参照)も必要

実際にタスクの中で使われている言語：*geography, the smallest*

生徒がタスクを達成するために必要な言語：“*I think that _____*”

- ほとんどの教師は「実際にタスクの中で使われている言語」を生徒に示すのは上手いが、「生徒がタスクを達成するために必要な言語」は、教師自身が上手く表現できないために、示されることは少ない。
 - ⇨生徒が会話せずにタスクに取り組んだり、自身の母語を使ってタスクに取り組む可能性がある。
- **教室でのスピーキング活動が上手くいかない理由**
 - －外国人の教師は日本人の生徒がいかに控えめなのかをよく知らない
 - －日本の教室において、教師の重要性をよくわかっていない
 - －話題が生徒にとって興味のないものである
- しかし、それらの理由とは別に、「生徒は何を言うべきなのかを知らない、または、すでに習ったことを使える自信がない」というのが、スピーキングの授業の中で最もよく見られる失敗である。
- 生徒が何を話せばいいのかわかっていないと知りながら、教えられるにも関わらず教師がそれを教えないようでは、生徒が話さなかったとしても不思議ではない。
- 活動を行う上で必要なことは、生徒の英語の語彙や文法の熟練度をよく知っておくことである。

※Appendix A と Appendix C にはそれぞれ ESL/EFL のクラスで教えるにあたって、知っておくべきことが載っている。

Factor 5: The Task that Serves as the Vehicle for Conversation

- 明確な目的のあるタスクを与えられたクラスは、目的が漠然としたタスクを与えられたクラスよりもよい成果を出す。
- **一般的な教師の特徴**
 - 教師の中には教室でのディスカッションで、一人で話していることに気づかず、授業時間内の 80% 近くまで一人で話し続ける教師もいる。
 - 文法や語彙の授業は得意だが、会話や討論の授業をうまく進行させる方法を知らない。
どうすれば良いか？
- 話題を選び、その話題をより特定の話題にしぼり、それに適した種類のタスクを選んだり作ったりする能力があれば、良質なスピーキングタスクができ、教師はほとんど話す必要なく授業を進行できる。
- 平凡なタスクを伴った良質な話題よりも、話題が平凡でもタスクが良質であれば、良い授業を行うことができるため、話題ではなくタスクや活動の点から授業を考える方がよ

い。

タスクを生徒にとって良いものにするのに役立つ**3**つのポイント

- ① タスクは情報交換を必要とするべきである。
- ② 学習者は「タスクを達成するための言語」について考える時間を与えられるべきである。
- ③ タスクは答えの数が絞られているものであるべきである。

第1章まとめ

これまでタスクを成功させる様々な要素がある中で、**5**つの重要な要素を紹介してきた。それらのどれもが、用いればタスクや活動を成功させることができると保証できるわけではないが、会話の授業が生徒の声で溢れるにしても静まり返るにしても、その**5**つの要素が不可欠な役割になるであろう。

Discussion Points

- ・どうすれば教師は「生徒が課題を達成するための言語」を習得できるか。
- ・どうすれば生徒が自信を持って習ったことを使えるようになるか。

発表後のディスカッションのまとめ

- ・「どうすれば教師は「生徒が課題を達成するための言語」を習得できるか。」について

他の受講生の意見として、「生徒が使っている教科書で使われている文を使う」というものと、「テキストの p.24 に載っているようなダイアログを作る」という意見が挙げられた。

時間がなく、あまり話し合うことができなかったが、私の意見としては、生徒の使っている教科書に載っているような文章は、ネイティブが使う日常表現とは少し異なると思うので、よりネイティブに近い表現を短期間で習得するにはどうすればいいのか、という疑問がまだ残る。多くの仕事を扱っている中で、教師が効率良く習得する方法を考え出せば、教師は授業の中でより多くの自然な表現を生徒に身に付けさせることができると私は考える。

- ・「どうすれば生徒が自信を持って習ったことを使えるようになるか。」について

この点については話し合うことができなかったが、私の意見は次に述べるようなものである。私が学生生活や教育実習を通して感じたことは、日本人の生徒は間違えることを恐れたり、恥ずかしく感じる傾向があるということである。これは、学校の授業が成否を問うような形式の問題ばかりを行ってきたことに原因があると私は考える。したがって、生徒が間違った答えをしたとしても、なぜそう考えたのかや、意見を述べたこと自体をほめるようにして、英語を使うことに対するネガティブな考えをなくすように接していけば、生徒は自信を持って学習したことを使えるようになると思う。

考察：今回の発表で私は、「具体的な目的を持ったタスクを与えること」と「タスクは情報

交換を必要とするものである」の二点が特に大事だと考える。具体的な目的がなければ、生徒は何をすればいいかわからず、タスクに対して消極的になってしまうのは仕方がないと私は考える。明確な目的があれば、教師も生徒に指示がしやすく、生徒もすべきことがはっきりしているので、より濃い内容の授業を行えるはずである。また、タスクが情報交換を必要とすることで、生徒は必然的に英語を使用する環境に置かれるので、それまでに学習したことも含めて、学習に取り組むことができる。さらに、情報交換をするということは、「相手のことや意見を知る」ということにつながり、生徒の好奇心を刺激し、そして自分の考えを相手に伝えることができた、という喜びにつながると私は考える。